特別レポート

「高校教育フォーラム 2013」
大学、そして社会につなげるキャリアとは？

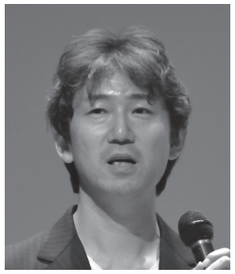
真夏の日差しが照りつけた８月３日・４日。京都大学百年時計台記念館で「高校教育フォーラム 2013」（主催：学研教育みらい　協賛：京都大学高等教育研究開発推進センター）が開催された。参加者は北海道から沖縄まで高等学校の先生方を中心に、総勢 259 名。高校での学びを大学、そして社会にどうつなげていけばいいのか、新フォーラムでの議論をレポートした。

大学生の現状から考える

「高校教育フォーラム」は、昨年までの「大学生研究フォーラム」併設「高校教諭のためのシンポジウム」を発展させ、より高校現場に密着して「学びとキャリア」を議論すべく開かれた。第１日目の総合司会は、鳥取大学・大学教育支援機構キャリアセンターの長尾博暢准教授。

「大学の部」ではまず、京都大学高等教育研究開発推進センター・溝上慎一准教授が「新フォーラムへの期待」を語った。

「大学は今、様々な教育改革でしっかり勉強させ、社会に送り出すことを目指しています。例えばアクティブラーニングなど、従来とは異なる学びの授業を設けていますが、熱心に取り組む学生とそうでない学生がいます。



京都大学高等教育研究開発推進センター
溝上慎一 准教授

その背景の一つは『キャリア意識』です。大学生のキャリア意識は全体として高くありませんが、大学に入ってから将来を考えようとしても、多くの学生は考えられないのです」。

キャリア教育は「キャリアデザイン」「技能・態度（能力）」「社会性」の３領域から成る。溝上准教授は京大生への「自学自習等学生の学習実態調査」から、４年次の11月に就職活動を諦めた人が約４分の１いること、内定者の約４割は第一志望企業ではないこと挙げ、社会人としての対人関係能力を指摘した。

「キャリアの問題は就活を含め、大学生活の土台の一つです。しっかり学生を育てるために必要だということを、先生方にも考えてほしい」と呼びかけた。

鳥取大学・大学教育支援機構
長尾博暢 准教授

★高校教育フォーラム 2013――大学そして社会への架橋
●第１日（８月３日　京都大学百周年時計台記念館一階大ホール）

◆スケジュール
○イントロダクション・「高校教育フォーラムの目指すもの」（10：00 ～ 11：15）
長尾博暢（鳥取大学・大学教育支援機構　キャリアセンター准教授）
大堀精一（学研教育みらい「学研・進学情報」監修）
○大学の部（10：15 ～ 12：25、14：00 ～ 14：45）
・新フォーラムへの期待と登壇者の紹介
溝上慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）
・レクチャー１「若者の友人関係、その現代的変化」
浅野智彦（東京学芸大学教授）
・レクチャー２「キャリア教育を見極め、なじませる」
浦坂純子（同志社大学社会学部教授）
・会場参加者ショート・ディスカッション
○ランチタイム・ミーティング（12：30 ～ 14：00）
・ご挨拶
・上村直之（学研教育みらい・学力開発事業部長）
・大塚雄作（京都大学高等教育研究開発推進センター長）
○大学の部続き：「パネルディスカッション」（14：00 ～ 14：45）
浅野智彦（東京学芸大学教授）
浦坂純子（同志社大学社会学部教授）
ファシリテーター＝溝上慎一（京都大学准教授）
○高校の部①（14：55 ～ 18：15）
・実践レポート１「文理の枠を超えて教養を培う－ SSH でできること）
駒形一路（静岡県立磐田南高校教諭）
・実践レポート２「13 年目を迎えたＫＩプロジェクト」
福永幸成（鹿児島県立甲南高校教諭）
・パネルディスカッション「高校におけるキャリア教育とは何か」〈パネリスト〉
小澤幸樹（岩手県立盛岡第一高校教諭）
島村精二（岡山県立岡山朝日高校教諭）
石井裕基（香川県立観音寺第一高校教諭）
大堀精一（学研教育みらい）
司会＝長尾博暢（鳥取大学准教授）
・フロアーからの質問
・第１日の総括
溝上慎一（京都大学准教授）
・懇親会

「使い分け」という作法

続いて東京学芸大学の浅野智彦教授が「若者の友人関係、その現代的変化」と題して講義。浅野教授は「友人関係はキャリア意識や進路の土台」と位置付け、各種調査から分析した。

若者の友人関係については、平成に入ってから、人間関係が希薄化したとする「関係希薄論」が言われたが、浅野教授は「むしろ日本では濃密化しています」と見る。一方、友人関係の濃密化で同調性圧力が強まったとする「友だち地獄論」に対しては、「男子中心に『他者への気遣い』は増えていますが、『学校に行きたい高校生』や『学校で楽しいことは友だちと話すこと』との声は増えており、当てはまりません」との見方を示した。

さらに平成12年以降は、若者の関心はテレビやおしゃれ、ゲーム、趣味へと拡散し、「友人関係への関心度合いはむしろ下がっています」。浅野教授らによる青少年研究会調査（図表①）では、「友人といるとき」と「一人でいるとき」の両方に充実感を感じるとの声もあり、「多元的な人間関係を自分の関心に応じて使い分ける作法が普及しています」と言う。人間関係に問題を抱える人は「使い分け」が上手くできないことになる。

浅野教授は友人や親子など親密さをベースにした集まりを「親密圏」、異なる背景を持ちつつ共同すべき他者の集まりを「公共圏」とし、友人関係をキャリアにつなげるには、「親密圏での使い分けを公共圏にも拡張したほうがいい。そのための訓練は親密圏でもできます」と言う。友人関係が多い人の方が就職活動も良好なことから、「公共圏へのチャンネルとして親密圏での人間関係をキープしておくことが大切」と語った。なお、学校は親密圏と公共圏の両者につながるチャンネルを持つ。浅野教授も大学１年次の『職業入門』という卒業生を招いて話を聞く授業を行っている。高校でも参考になるところだ。

大学生はより、切実

次に、同志社大学社会学部・浦坂純子教授が「キャリア教育を見極め、なじませる」と題して講演した。雇用の流動化が進み、企業内の人材教育機能も低下する中、高校は生徒の需要（進学率）を踏まえ、キャリア教育を見極める必要がある。「就職活動に矮小化せず、一人ひとりに自らの人生を考えさせ、キャリアを築く力を身に付けさせる必要があります」と浦坂教授。

普通科高校を対象とした「キャリア教育の現状に関する調査」によれば、キャリア教育を包括的、複合的に実施（多種多様性）し、長年の蓄積（継続性）があり、地域や家庭との連携の充実しているほうが、単発・単独の実施よりも、キャリア意識が高まるという。家庭や専門高校との連携や、公立高校への人的・財政的な支援も必要だ。

キャリア教育を日常生活に「なじませる」のは授業である。「講演会などで高校生は一生懸命、感想を寄せてくれます。その姿勢が明日以降に少しでもつながるよう、授業でもキャリア

を意識すると効果が増します」。

後半は大学でのリアルな支援の様子である。「私立大学は学生確保のためにも、学生の心が折れないように注意しつつ支援しなければならず、常にジレンマを抱えています」。とはいうものの、「大学での学びは社会人として40年以上働く底力」と浦坂教授。論文やレポートに取り組む力が、新しい仕事に挑戦したり、他人と協力して仕事を行うことにつながると強調した。

自己理解と他者理解を目指す

「高校の部」はキャリア教育の実践例の報告からスタート。

図表①　今日の友人関係

充実感の関係：「友人といるとき」と「一人でいるとき」

			他人にわずらわされず、一人でいるときに充実していると感じる	
			いいえ	はい
友人や仲間といるときに充実していると感じる	いいえ	度数	23	12
		総和の%	9.6%	5.0%
	はい	度数	140	64
		総和の%	58.6%	26.8%

青少年研究会 2012 年調査より（杉並区および神戸市灘区・東灘区の 16 歳から 18 歳男女）

最初は静岡県立磐田南高校の駒形一路先生による「文理の枠を超えて教養を培う―SSHでできること」と題する発表である。「自己理解と他者理解ができれば自ずとキャリア意識は作られるのではないか」と駒形先生。続いて「スクラップリレー」「縦割り合同HR（「錬成の時間」）」、「科学の眼で読む古典」（SSH学校設定科目「サイエンス探究」）が紹介された。

このうち「スクラップリレー」はグループを作り、一人がスクラップブックに貼り付けた新聞記事に他のメンバーが次々とコメントして回すもの。他者の関心事に目を向けることで、自分の視野を広げようとするものだ「読む自分、選ぶ自分、コメントを書く自分、反応を読む自分、再反論する自分など色んな自分が現れます」と駒形先生。

また「錬成の時間」は1年生と3年生による合同HRで、悩みや相談を車座で話し合うものである。「互いに育ちあう時間になってくれれば」と駒形先生。

そして「科学の眼で読む古典」。古典文学に描かれた自然や科学的な現象を教材に学ぶ試みだ。源平盛衰記での金環日食や方丈記での津波の描写などを扱う。「これからの時代に生きるために必要なのは『教養』です」。駒形先生はこう結んだ。

次は鹿児島県立甲南高校の福永幸成先生による「学校の教育活動全体を通じて行うキャリア教育を目指して」と題する発表である。甲南高校では、進路指導部中心に「学力向上対策（朝の特別指導、土曜講座、3年放課後講座）」とともに、「教育活動全体を通じて行うキャリア指導」を行ってきた。

その中心が、総合的な学習の時間の「KIプロジェクト」で13年の歴史を持つ。指導の柱は「テーマ学習・小論文コンクール」「ディベート」「先輩に学ぶ進路セミナー」「マスターピース（論文作成）・プレゼン」の4本。「枠は変えずにいかにその中で教員と生徒が楽しむかを重視しています」と福永先生。

例えば1年次の「テーマ学習・小論文コンクール」。以前は業者のものをやっていたが、ここ数年は各学年のKI担当者が集まってテーマを話し合っている。ちなみに平成24年度のテーマは「オリンピック」。経済や文化、倫理など様々な観点からオリンピックにアプローチした。

さらに同じテーマでディベートを行う。「今までは表現力をつけようとしてきましたが、昨年からは『どういう視点で評価するのか』に力を入れています」。

先生方が心がけるのは、「徹底的に諦めながら、状況を楽しむ」という方向性だ。例えば1年次「先輩に学ぶ進路セミナー」や2年次修学旅行での「職場訪問」では希望先に行けない生徒もいる。その時は「受け入れ先の気持ちを理解し、どう楽しんで取り組むのかを問います」。

また2年次後半からは志望別にグループでマスターピース（論文）を作成し、優秀な生徒は3年の文化祭で発表するが、「負けた生徒は、グループの代表者の手伝いをさせます。自分は次に何ができるのかを考え、グループ同士で自他理解を深めることを狙いとしています」。

こうした取り組みの結果、「自分で何かを切り開こうとする姿勢が生まれてきました」と福永先生は成果を語っていた。

図表②　「キャリア教育の現状に関する調査」で分かったこと

- **キャリア教育を包括的、複合的に実施すること（多種多様）**
- **長年のキャリア教育の蓄積があること（継続性）**
- **学校以外の地域や家庭との連携が充実していること**
  ⇒単発あるいは単独の試みよりも優位性を持つ
  ・進学率が高くても、**将来設計**や**就業意識**の向上などをもたらす効果は観察されている。
- **「色々やってみる」「続けてみる」の意義**
- 目の前の生徒一人一人に何が響くか簡単にはわからない
- キャリア教育を見極めるには、多種多様なアプローチをやってみること、時間をかけて検証し、練り上げていくことが求められる。
- そのためには、学校以外の協力が不可欠
- キャリア教育の看板がないところでも「色々やってみる」「続けてみる」

（「キャリア教育を見極め、なじませる」より）

図表③　高校の部①　実践レポートの内容

●実践レポート1
「文理の枠を超えて教養を培う」～ SSH でできること
（静岡県立磐田南高等学校）
◎「枠」を創ること、「枠」を超えること　自己理解・他者理解
実践1　スクラップリレー
実践2　縦割り合同 HR =「錬成の時間」（総合的な学習の時間）
実践3　「科学の眼で読む古典」= SSH 学校設定科目「サイエンス探究」

●実践レポート2
「学校の教育活動全体を通じて行うキャリア教育を目指して」
（鹿児島県立甲南高等学校）
◎**KIプロジェクトの概要**
・KIプロジェクトの構成
A　テーマ学習・小論文コンクール
B　ディベート（学級内・学級対抗）
C　先輩に学ぶ進路セミナー（職場訪問）
D　マスターピース（論文作成）・プレゼンテーション

それでも、キャリア教育

1日目の最後を飾ったのは、高校の先生方によるパネル・ディスカッションである。先の実践例への質疑応答と共に、「高校でのキャリア教育」への自熱した議論が繰り広げられた。

「正直、キャリア教育に対してはネガディブなイメージを持ってきました。必要なのはキャリア教育ではなく、人間教育ではないかと」。口火を切ったのは、岡山県立岡山朝日高校の島村精二先生。「学ぶ、働く、生きることのバランスの上に成り立つはずが、働く面が肥大化し就職中心となっています」。

香川県立観音寺第一高校の石井裕基先生も「キャリア教育の『教科化』への動きも聞きますが、そこまでやりたいのかと。キャリア教育の4領域を突き詰めると授業を能動的に受け、部活動や学校行事を積極的に行うことになります。文武両道こそキャリア教育では」と語った。

司会の長尾准教授は「それでは職業や就職、働くことをどう位置付ければいいでしょう?」と質問。島村先生は「高校生の働くことは『学ぶこと』。そこを一番重視すべきです。ただし職業に無防備ではいけないので、社会の厳しい現状や雇用環境はきちんと伝え、『乗り遅れてはだめ』とは言わず、現実を生徒がどう引き受けるのかの投げかけが大事では」と語る。

同様に岩手県立盛岡第一高校の小澤幸樹先生は「私も高校生活自体がキャリア教育だと考えています」と強調した上で。同校の具体的な取り組みを紹介。「例えば1年次の応援練習は、理不尽なことをどう受け入れて楽しむかを先輩から後輩に伝える機会です。また1年次は企業人へのインタビュー、2年次には養護学校との交流事業、さらに卒業生によるキャリア講演会など、社会とのつながりを意識しています」と語った。

一方、石井先生は「進路指導とは生徒に出会いをプロデュースすること。『学びの面白さ』を伝えることを念頭に置いています」と強調。SSH3年目の観音寺第一高校では大阪大学を訪問して一億円の実験設備に接したり、大学関係者や社会活動家の講演会で「生徒が色々なことを感じ、社会でどんな役割を果たすのか、志を持たせること」を心がけているという。

これらに対し、長尾准教授は「キャリア意識が低いために勉学が伸びない大学生の現実を突き崩すために、高校ですべきことは?」と畳み掛けた。島村先生は、「合格しさえすれば、大学の勉強で一生食いつなげる時代ではないのでしょう。一生学び続ける工夫を高校でもしていかないと」と指摘。石井先生は「私は数学科ですが、今は問題集も解答が丁寧に示され親切すぎる。我々は疑問を投げかけ、生徒が自分で考える機会を与えないと。ただし社会情勢については我々自身も勉強しないといけません。教科指導だけではダメですね」と語った。

以上に対し、溝上准教授は重

ねて「高校でキャリア教育が必要な背景」と「キャリア教育の３領域を押さえ、系統立てることの必要性」を強調。さらに今後は、高校でも「キャリア教育の成果を客観的に検証する必要があります」と指摘した。

一方、教科への関心を軸に学部・学科選択が行われてきた状況には、「今の職業は文理融合で複合的です。将来の仕事も見ながら、どう指導していくのかが課題ですね」と締めくくった。

様々な「つながり」の可能性

第２日目に発表された高校進路指導のネットワークや実践例の報告を見てみよう。

まずは北海道函館中部高校の大内英紀先生の「ゆる～い地域の、ゆる～い連携」。函館はじめ道南の高校のネットワーク（通称「チーム函館」）の取り組みで、公立・私立の壁を越え、進路情報や推薦・ＡＯ入試対策や各高校の取り組みについて情報交換会を行うものだ。

「函館から札幌まで片道４時間かかる中、進路指導部長になって情報格差を感じ、もっと外の世界に目を向けるべきだとの思いが強くなりました。地域の子どもたちの視点で、情報を発信し、提供し、共有することが大事だと考えています」と大内先生。連携が功を奏し、公立校から私立校に推薦入試の相談を持ちかけて合格したこともあった。「私たちのつながりはウィークタイ。表面的で浅いですが、その分、軌道修正しやすい。元気の乏しい地域だからこそ、互いにつながりあい、競争から共創への関係を築ければ…」と大内先生は結んだ。

続く発表は、徳島県立川島高校の岡田善史先生による「元気な学校づくりについて考えること」。岡田先生は前任校の徳島県立脇町高校で１９９６年に「小論文委員会」を立ち上げ、「広く考え、表現する指導」「社会・時事問題への意識を高揚させるための指導」に向け、全校体制を築いたキーパーソンである。

「今の状況は、私たちが取り組みを始めた90年代後半とよく似ています。参考になることがあれば…」と岡田先生。

新聞記事を貼りつけるだけで生徒の負担感をなくした「スクラップブック」や「ディベート学習」、「職業研究や学部・学科研究」は、今のキャリア教育を先取りした実践だ。

だが岡田先生が進路課長５年目の時、小論文委員会の形骸化と「不要論」が浮上。「不要論は負担感や不安から生まれます。教師が生徒から学び、成長を感じることで負担感は軽減します」と岡田先生。様々な議論の末、小論文学習はＷｉｎｇプランとして今も継続されている。

岡田先生の勤務校である川島高校は、中高一貫の総合高校。小論文指導を中心に据え、教科学習でもキャリア教育を実践。ブランド化できる新しいアイデアを模索中だ。「ヒントは生き延びる力の養成にあると思っています」。岡田先生はこう語った。

最後は青森県立弘前高校の千葉栄美先生による「ガラスの天井の先へ～女生徒のキャリア教育、女性による進路指導」と題する発表である。千葉先生は日本の女性就業者の現状を示し、少子化対策のためにも就労と子育て両立への環境整備を訴えた。

一方、女子生徒は「高校では非常に意識も高く、行動力もありますが、将来の進路となると、自らの中にガラスの天井を作ってしまいます。現実社会の矛盾を敏感に感じ取り、見えない壁を作りがちです」と言う。そこでロールモデルを示すこと、就業への覚悟をつけ、選択肢を示すことの大切さを訴えた。

働く女性のキャリアは、女性教諭自身のテーマでもある。最

●第２日（８月４日　京都大学百周年時計台記念館２階国際交流ホール）

○高校の部②（10：00～12：45）
◆スケジュール
・特別企画（対談）（10：00～11：00）
「人の心を思いやる想像力の育成－これからの教育」
原島博（東京大学名誉教授）
村上育朗（教育未来研究会「そうぞう」代表）
・高校現場からの報告（11：10～12：10）
大内英紀（北海道函館中部高校教諭）
岡田善史（徳島県立川島高校教諭）
千葉栄美（青森県立弘前高校教諭）
・２日間を振り返って（12：10～12：40）
溝上慎一（京都大学准教授）
長尾博暢（鳥取大学准教授）
・閉会の辞
上村直之（学研教育みらい・学力開発事業部長）

特別企画（対談）

悩むことと挫折が「共感」の源泉

原島博先生（東京大学名誉教授）vs 村上育朗先生（教育未来研究会「そうぞう」）

教育未来研究会「そうぞう」
村上育朗 先生

東京大学名誉教授
原島博 先生

原島博先生（東京大学名誉教授）は「日本顔学会」の設立者で専門はコミュニケーション。東日本大震災が縁で村上育朗先生と親交を深めてきた。

この日の村上先生は「聞き役」。村上先生の「フォーラムへの感想は？」との質問に「保護者の期待に応えつつ、もっと素晴らしいことがあるとのメッセージを送ることが学校教育では？」と原島先生。

話題は被災地の子どもたちの活躍ぶりへ。「彼らは『間』が与えられた」と原島先生。避難所がかつての「原っぱ」の役割を演じたと見る。逆に「大人が何でも面倒を見てしまうから子どもは自立できない」と村上先生。原島先生は「コミュニケーションとは相手との距離のデザイン。自立できない若者の背景には、適切な距離が取れない親の問題があります」と分析した。

一方、国際社会で求められるものとして原島先生は、「相手から『日本には学ぶことが多い付き合って面白いな』と見てもらうことが大切。日本のことをたくさん知ることが大事ですね」とアドバイスした。

村上先生は「相手に共感することが大切」と指摘。対する原島先生は「挫折が無いと共感もできない。だから悩むことが大事です」と語る。溢れる言葉を必死で抑える村上先生と、冷静でユーモラスな原島先生の好対照ぶりに、会場は大いに沸いた。

近は進路指導の女性教諭も増え、「強さだけでなく、しなやかさや柔らかさを生かした支援が強み」と千葉先生。女子のロールモデルとして「私たちも生き生きと働くことが大切」と語る。今年２月には「全国女性進路指導研究会」も発足。フォーラム終了後、早速、第１回の総会が行われた。

＊

３年間継続して語られた、「高校生の学びとキャリア」。「グローバル社会に日本が飲み込まれている以上、好きでないからとかやりたくないからとは言っていられません」（静岡・Ａ先生）との声の一方、依然として厳しい意見もある。

ただし今年は「大学が就職予備校ではないという姿勢で動いている以上、高大接続に向けて高校も変わらなければ」（北海道・Ｂ先生）「キャリアという言葉に捕らわれていましたが、本質的な部分を見ていかないといけない」（徳島・Ｃ先生）など、認識の変化も見えてきた。

さらに「キャリア教育を学問的な魅力に結びつけることの難しさはよく議論されます」（秋田・Ｄ先生）「数学などは入試に関係ない教養的な部分に触れようとすると、とたんに意欲が下がる生徒もいます」（茨城・Ｅ先生）など、教科で具体的にどうキャリア教育を扱うべきか、課題を訴える声もあった。

その中で「一番の基本は生き方教育、命の教育です。日本の自殺率は世界一高い。こういう時代だからこそ、それがなぜかを我々教員は考えなければいけない」（山形・Ｆ先生）との声は極めて重みのある一言だろう。

岡山朝日高校の島村先生は一日目の最後に「飽和気味な入試情報に比べ、大学でどんな教育が行われているのか、知る機会はあまりありません。私たちがこの会に参加する意味は、そこにあります」と発言した。生徒の意識を大学の学びと社会につなげるため、高校は何をし、大学はどう支えるのか。高校と大学の具体的な連携に向け、さらなる議論が求められるところだ。

（取材・構成／福永文子）